

talk! talk! talk! 女優・須藤理彩さん



女優 須藤理彩さん

それまでまったく興味がなかったものに、突然目覚めてしまったという経験はあるだろうか。NHKの連続テレビ小説「天うらら」のヒロインとして鮮烈な女優デビューを果たした須藤理彩さんは、この世界に入ってから出会ったカメラに突然目覚めてしまったという。今や数台を所有するというカメラ好きの須藤さん。カメラを手にしたきっかけから、普段どんなふうにかメラを向けているのか、何を撮影しているのかなど、カメラについて根掘り葉掘りうかがった。

プロフィール

すどう・りさ。1976年、神奈川県生まれ。1998年、NHK連続テレビ小説「天うらら」のヒロインを射止めデビュー。親しみやすく元気なヒロインを演じ注目を集める。その後も「救命病棟24時」（フジテレビ系）「利家とまつ」（NHK）「最後の弁護人」（日本テレビ系）など多くのドラマに出演、また2003年には初主演映画「ハート・オブ・ザ・シー」に出演するなどそのキャリアを着々と積み重ねている。2000年に野田秀樹作・演出のNODA・MAP「カノン」で舞台上に初挑戦し好演、以降舞台活動も積極的に行っており、今後ますます期待される女優である。趣味は写真の他にも料理、音楽など。また、高校時代には陸上部に所属し、200mで神奈川県1位の記録を出す。インターハイではベスト16に入ったという経歴も持つ。2月からは演劇界の鬼才、蜷川幸雄氏演出の「新・近松心中物語～それは恋～」にお亀役で出演が決定している。「新・近松心中物語～それは恋～」は、2/2～2/26名古屋：御園座、3/4～4/29東京：日生劇場で公演。

カメラを感じる快感は「会心の一枚が撮れたとき」

カメラを始めたのはいつ頃からですか？

この世界に入ってからなんです。21歳とか、それぐらいですね。ちょうど誕生日に中国へロケに行っていて、そこでスタッフさんからカメラをプレゼントされたんです。

それまで興味があったというのではなく？

はい。それまではまったく興味ありませんでした。いただいて、撮ってみて目覚めてしまったといいますか。中国の後にドラマの撮影でアフリカに行ったんですけど、そこで初めてたくさん写真を撮ったんですよ。野生の動物を間近で見ることなんて初めてですから、興奮しちゃってずっと動物ばかり撮ってたんです。そのうちに自然や、風景を撮るのも楽しくなってきました。

好きになった？

そうです。安いフィルムをたくさん持って行って、試行錯誤をしながら何百枚も撮ったんですよ。失敗がほとんどなんですけど、その中に一枚でも気に入った写真があるとすごくうれしくなってしまう。特にいいフィルムを使ったわけでもないのに、「うわ、これすごい！これを自分が撮ったんだー！」みたいな。うれしいというより、快感ですね。

アフリカで撮影されたときに、そういった会心の一枚があったのですか？

あったんですよ。動物ではなく虹の写真です。今でも鮮明に覚えているんですけど、ドーム型の虹が出たんです。

ドーム型？

ホテルがすごく高台にあって、崖の下にはサバンナがぱーっと広がっているところだったんです。ちょうどお休みの日だったので本を読んでいたら雨がザーッと降ってきて。それで、止んできたなあとと思ってパッと外を見たら、二重の虹が真っ平のサバンナに出ていたんです。二重で、はじからはじまできれいに出てたんですよ。

それで、なんでドーム型の虹だっというのかわかったかという、虹の内側が丸く光っていたんです。外側の虹との間が少し暗くなっていて、その虹の外側は真っ暗でした。暗いサバンナに、スポットライトが当たったみたいにそこだけ光っていたんですよ不思議ですね。それはなかなか見られないでしょうね。それで、その写真を撮ったのですか？

はい。虹が大きすぎてさすがに全部をフレームに入れることはできなかったんですけど、虹を半分切り取った形の写真を撮りました。半分は明るくて、虹を境に真っ暗になっている写真です。

こういうのってなかなか写らないんだらうなって思っていたから、出来上がったのを見たら「おおー」ってなりましたよ。それが初めて撮りたい写真ですね。

その写真でカメラにはまってしまったんですね。

自分の世界に入り込めるカメラ

カメラは数台お持ちだそうですね。

自然と集まっちゃいましたね。時と場合によって、フィルムコンパクトカメラにしたり、デジタルカメラにしたり、一眼タイプのカメラにしたり。最近では仕事で海外に行く機会がすごく多かったので、デジタルカメラがもってこいでしたね。

それはどうしてですか？

やっぱりフィルムをたくさん持っていくのは大変だし、仕事の現場であまり大きなカメラは持ち込めないの、ポケットに入れてサッと撮れるデジカメがいいんです。

でも基本的にカメラを仕事には持っていかないんですよ。海外のロケなどでは、わがまま言わせてもらって撮影の合間に撮らせてもらっていますが、ドラマなどの現場ではその仕事に集中したいので反対にカメラは持ち込みたくないんです。自分の中でカメラはプライベートの範囲という意識がすごく強いんですよ。

純粋に興味として楽しみたい？

そうですね。カメラは自分だけの世界なんです。出来上がった写真を見る行為っていうのは、すごく自分の世界にいるって感じるんです。

自分で撮ったものを見ると、自分の中でいろいろな思いがふくらんでいいなあって思う。でもいくら自分がきれいに撮れたと思って人に見せても、その人の思い出の写真ではないので、それほど感動が伝わらないことってありますよね。それを考えると、カメ

ラって本当に自分の世界を表現するものなんだあって思いますね。
では、よく見返してみたりするんですか？

よく見ますね。私、アルバムに整理するのも好きなんですよ。
まず、撮った写真を一冊のアルバムに全部入れるんです。次にそこから気に入ったものだけを焼き増して、ノートみたいなものを買って貼っていくという作業があるんです。お気に入りのを集めたアルバムですね。アフリカのときに撮った写真はそうやってまとめて祖母にプレゼントしました。喜んでいましたよ。

デジタルカメラの場合でも、必ずアルバムにするんですか？

私は必ず全部プリントしますね。プリントにならないと何も残らないというか.....。パソコンに取り込んでCD-ROMに焼いておいてっていうのもあるんですけど、最終的にプリントとして残さないと、フィルムを現像に出していない状態のような感覚があるので、うん、必ず出します。あと、パソコンがちょっと苦手っていうのもあるんですけどね（笑）。



変化してしまうものの一瞬を写真に残す

何枚か写真をお持ちいただいたのですが、まず、これはなんですか？

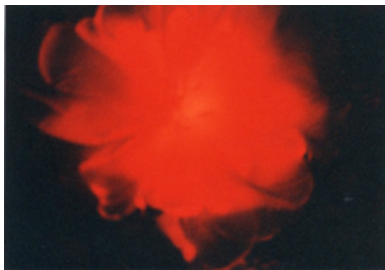
これは誕生日にいただいた花なんです。チューリップなんです。部屋を真っ暗にして、花の中心にろうそくを立てて撮ったんです。どうなるのかなって思ったら漏れた光がボワッと光って、すごくきれいですよね。私、赤がすごく好きなんです。だから額に入れて部屋のインテリアとして飾ってあるんですよ。

お気に入りなんですかね。

プロのカメラマンさんがテレビで紹介していたんですよ。こうやって撮ってみたらおもしろいのでって。ライティングに工夫するって写真が撮れます、とか言われると、ああ、なるほどって。

そうやっているいと試しながら撮ったりもしているんですね。あとは風景写真ですが。

これはアメリカですね。写真にあるような岩がごろごろしている場所で、そのうちのひとつを切り取って撮影しました。あとの3枚はつい一週間前にニュージーランドから帰ってきたんですが、その時の写真ですね。小型ジェットからふるえながら撮ったんです、これは。



ろうそくの灯で撮影したというチューリップ。



アメリカ、モニュメント・バレー。ナバホ族の居留地で、写真のような岩山が点在している。

ふるえながら？

この時飛行機がすごく揺れたんですよ！ だから何か気を紛らわそうと思って必死に撮っていたんです。窓があるからうまく撮れなかったんですがこれは偶然窓に当たった光が生かされたという。あとは海と、こちらは湖です。映画のロード・オブ・ザ・リングのロケ地のそばから撮影したものです。どちらの写真も空がいいなあと思います。.....けっこう雲の形に惹かれて撮ることが多いかもしれないですね。

空を撮るのが好きなんですか？

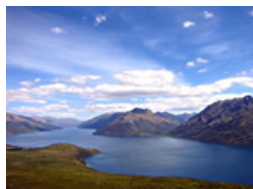
好きです。残念ながら東京だと空を見上げて歩くということが少なくなってしまったんですけど、海外に行くと空見えますね。やっぱりいるいるなものを見たという思いが強くなるので、自然と顔が上を向くんですね。日本だと生活感のある風景が目に入って、歩いていても、正直あまり撮りたいと思う瞬間もなくなってしまいましたね。

撮りたいと思うのはどんな瞬間なのですか？

普通に、きれいになって思うとき。それから、朝日や夕日、雲の形って一瞬ですよ。たとえば朝日はちょっと目を離したすきにあっという間に昇ってしまったりしますよね。だからその、見たときの瞬間を撮っておきたいというのがあってあります。変化してしまうものを写真に残しておきたいんです。



12月に訪れたニュージーランド。あちらは今、真夏。日ざしの強さがうかがえる。



ニュージーランドで最も長い湖、ワカティプ湖。映画のロケ地はもう少し山を分け入ったところにある。



旅客機の窓に写りこんだ光の加減がお気に入りだそう。

自分の目で見たものをカメラを通して記録する

写真の一番の魅力はどこですか？

写真を見ると、そのときどきのことを思い出すことができるんですね。私はカメラでは風景しか撮らないんです。でも、その風景写真から、たとえばここは仕事で行って、こんなことがあって、こうこうで辛かったよなとか、鮮明に思い出すんですよ。記憶というか、記念というか、そういうのを忘れたくないでしょうね。

やはり写真に残しておきたい、という気持ちが強いんですね。

そうなんです。よくありがちなパターンなんですけど、私次女なので、子供の頃の写真が少ないんです。姉の写真は、足跡が表紙になったようなアルバムに、生まれてからのものが刻々と残っていたりするんですけど、私の写真はただ箱にザッと（笑）。それがなんかよくなくて、記念に残したいっていう気持ちがすごく強いんだと思います。

でも、ご自身が写っているのではなく、おもに風景を撮っているんですね。

たぶん、職業柄だと思うんです。こういうお仕事をさせていただいていると自分の映像が残るんですよ。だからあまり自分の姿を残しておきたいという欲求はないんです。逆に、そうやって第三者から見た映像ばかりがあるので、自分の目線の映像を残したいんですよ。そうすると、自分から見た風景っていうのはやっぱり自分で撮っていくしかない。

だから、プライベートで友達と撮るっていうのもあまりないし、共演者の方とは打ち上げの席で最後に一枚って言って撮るぐらいなんですよ。

自分の見たものを残していくというスタンスで、今後もカメラを構えていくという感じでしょうか。

そうですね。

あ、でも今までの話とまったく変わってしまうんですが、唯一、風景以外で撮りたいものがあるんです。うちのわんちゃんなんですけど、本当に言うことを聞かない子で！一枚もいい写真がないんです。いつも挑戦するんですけど、落ち着きなくてひとつの所にじっとしてられないんですよ。撮ろうとすると逃げるので、いつもカメラ持って追いかけて回しているような状態で。目を合わせてくれないんですよ……わが子ながらバカさ加減にあきれてしまう（笑）。

では、わんちゃんのかわいい写真を撮るといっても目標にしているとは。

はい、いつかは撮ります（笑）。

基本的にはこれからも、カメラを持つ機会があったらそのときどきで、きれいだなって思ったものや、何かを感じたときに見た風景を残していきたいですね。それからニュージーランドに行ったとき、カメラマンの方がカメラをずっと開放にして星空を撮っていたんです。すごくいいなって思って。難しそうだけど技術を磨いて、機会があれば星空にもチャレンジしてみたいですね。

「常に課題を持って女優として成長しつづけてたい」



「新・近松心中物語～それは恋～」/千回以上の上演を重ねた作品を蛸川幸雄が再演出。メインキャストを一新し、ひたすら死に急ぐ若者たちのラブストーリーを描く。

んのレベルの高さに圧倒されてしまって。見なければよかったと心から思いました。でも、とても楽しんでいます。脚本自体が素晴らしいので、絶対におもしろい舞台になること間違いありません。

今回の舞台、須藤さんの具体的な目標はなんですか？

蛸川先生から指示されたことを後回しにしないで、そのつど応えていきたいです。一日、一日が勝負だと思えますし、それを後回しにすれば最終的に吸収できることも少なくなってしまうので。

今までは先送りにしてしまっていたことも、今回は気持ちを引き締めて、一日一個でも消化したいですね。長丁場ですから、終わったときにはぎっとたくさん課題が消化できているんじゃないかと思っています。

しごかれる覚悟はできている、という感じですね。

そうですね。間違いなくしごかれるでしょうから、それは覚悟しています。もう、どん底まで打たれまくりたいと思っています。

その後、どんなふう成長しているか楽しみですね。長い公演ですが、くれぐれもお身体に気をつけてがんばってください。

ありがとうございます。自分でも楽しみにしています。絶対におもしろい舞台ですから、ぜひ見に来てください！

女優としての目標を教えてください。

最終的な目標というより、この仕事を続けていく上で、常に成長していきたいと思っています。だから、新しく仕事を始めるときは、いつも自分に課題を持つようにしているんです。仕事に手を抜いているわけではないんですけど、そうしないと意欲が半減するというか。

この仕事はこうしよう、これができるようになるうとか、そういう具体的な目標を持つと、それをクリアしていくことでその仕事の前と後で自分の成長に気づきやすいんです。これからも、仕事には常に目標を持って臨みたいですね。

今年は大きな舞台に立たれるそうですね。

そうですね。蛸川先生の「新・近松心中物語」っていうんですけど、今ももう稽古三昧の日々です。

これまでに多くの方が様々に演じてこられた名作ですね。

実はビデオをお借りして見てしまったんですね。今回梅川役の寺島さぶさんが、私のやるお亀役をやっていたときのものなんですけど、寺島さ



[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.